〔東京家政大学研究紀要〕第55集 (1)，2015，pp.131～140〕

3歳未満児保育に対する造形表現活動の意義
―臨床美術実践プログラムの導入―

保坂　遊*・青木　一則**

（平成27年1月7日査読受理日）

The Significance of the Creative Expression Activities for Children Under 3
― The Introduction of The Clinical Art Experience Program ―

HOSAKA, Yu　AOKI, Kazunori

（Accepted for publication 7 January 2015）

キーワード：3歳未満児保育，造形表現，臨床美術
Key words：Childcare of children under 3, Creative expression activities, Clinical art

Ⅰ．はじめに

本研究の目的は，乳幼児（3歳未満児）に対する保育活動において，造形表現活動の視点からより発達に適した保育内容の充実を図るプログラムを開発することにある．昨今の幼保一体化施策の潮流の中，3歳以上児に対する保育内容については，幼稚園教育と保育所保育の双方から，多くの実践や議論が重ねられてきた．しかし，0～2歳児の表現活動については，保育所保育指針にあるように，その発達の特性から5領域を明確に区分することが難しいとされ，具体的な保育内容や方法についての議論については十分ではない．これまで筆者らは保育現場における3歳未満児に対する保育内容について，現任保育士アンケート調査[1)]より課題を抽出してきた（保坂ら，2013）．各保育所では低年齢児においても，心身の成長に伴って，様々な感覚的な活動に触れることが人間形成の基盤として重要視されており，日々の保育活動の中で多様な造形アプローチを展開していることがわかった．しかし，一方では「子どもの満足度」，「内容や教材，形態のあり方」について多くの悩みや不安を持ち，「造形表現活動と子どもの成長の関わり」についての理解が不足していることが挙げられた．本研究では，こうした課題を基に，0～2歳児の乳幼児に対して造形表現活動の芽生えを培う保育内容の具体的なモデルを検討するため，臨床美術の手法を導入したプログラムを立案・実践し，これらより得た知見から，低年齢の表現活動として感性の基盤形成初期に求められる造形表現活動の主要素を抽出する．

＊　子ども学部子ども支援学科
＊＊　東北福祉大学子ども科学部

Ⅱ．3歳未満児にとっての造形表現とは

子どもはその成長に伴って初発的な表出行為から，自ら意識的に表現する技術を獲得していく過程を辿る．その基盤となる入力段階は，生命維持としての基盤となる感覚器官の発達との関連が深い．胎児はすでに母体の中で，触覚，聴覚，味覚といった感覚受容器を発達させ，この世に生を受けるための準備を進めている（遠藤）[2)]．生後，これらの五感は急速に発達し，身の周りの世界から情報を集め知的発達のための形成基盤を培う．こうした早期からの感官の生物学的発達と乳児（あるいは人として）の脳科学的発達研究との関連が昨今では指摘され始めている．例えば，すでに生後3ヶ月での乳児の自発的運動と学習意欲の関係や，reachingと呼ばれるモノへの興味関心の芽生え，「快」「不快」感情と報酬予測による幸福感発生機序説等[3)]（小泉），乳児の発達に対して未熟と認識されていたこれまでの知的発達の理解を再度見直す必要性が問われている．またアフォーダンス理論に基づく環境が乳幼児の育ちに大きく影響する指摘[4)]（佐々木）など，環境を含む新たな視点から乳幼児の育ちを捉え直す意識の高まりが見られる．

また保育所保育指針や幼稚園教育要領では「感性を育むこと」を表現領域のねらいとしているが，この『感性』を「物や事に対して，無自覚的，直感的，情報統合的に下す印象評価判断能力」[5)]（三浦）と捉えるならば，五感で十分に感じ，自ら考え，表現行為へと結びつけていく体験を自由に，何度も，様々に積み重ねて『経験』としていくことが，感性を育成し，知的発達や概念形成の基盤作りとなる[6)]（無藤）．保育の対象として，まさに感性の芽生えである乳児から一環した育ちを捉える保育内容の連続的な発達への支援を総合的に考えていかなければならないであろう．

Ⅲ．臨床美術を保育へと応用する意義

臨床美術とは，1996年より認知症高齢者に対するリハビリテーション及び認知症予防プログラムとして，脳活性化を目的として研究，実践が進められてきた芸術療法である．芸術療法は主に，フロイトやユングに影響を受けたアートサイコセラピーや箱庭療法などが一般的に知られているが，これらの実践は患者の「意識」と「無意識」の心の溝に橋を架けることで大きな効果が生まれてくるという．これに対し，臨床美術は美術創作体験そのものが脳を活性化し，癒しがなされることに力点がおかれている[7]．また，従来のアートサイコセラピーは，精神科の医師や，心理士の分野であったが，臨床美術ではアーティストも含み専門の教育を受けた臨床美術士がその役割を担っている．この臨床美術の実践効果の検証が蓄積され，これまで多くの病院，高齢者介護施設，自治体事業等へ取り入れられ，全国的に広がりを見せている．また，こうした取り組みは様々な分野に汎用化されており，保育所，幼稚園，小学校などの教育現場，発達障害児，障害者等へのアプローチとして展開されてきた．認知症高齢者を対象として始まった臨床美術がなぜこのような広がりを見せたのか．それは臨床美術の方法論の基盤となっているものが金子健二[注)]が長年取り組んできた子ども造形教室でのノウハウの集約であることは重要な要素である．金子は個人の才能や表現技術を競う「競争」の芸術から，共に表現する喜びを分かち合い，個性を認め合う「共生」の芸術への転換を唱え，日本の美術教育のシステムである高度な技術習得の過程から脱却し，カリキュラムと働きかけによってどんな人にも自己実現としての表現を可能にする臨床美術が今後の美術教育にとって重要であると指摘[8]（保坂，金子ら，2004）した．これまで美術教育では知的発達や概念獲得といった理論に基づく表現技術の習得が主な目的だったが，臨床美術の特色であり豊かな感性を解放する手法や，共に他者の表現を認め合う共感の姿勢が，子どもの心を育む新たな視点として評価されたといえる．

また，臨床美術の特徴として挙げられることは，美術創作活動を主体とした総合的プログラムであるということである．セッションは，［導入］―［制作］―［鑑賞］といった一連の形式を重要視して実施される．〔導入〕では，感性の覚醒を目的として，視覚的刺激のほか，音楽（歌）や身体表現，また自然物に触れるなどの体験を通して，テーマに対する意欲や関心を引き出す工夫を重要視している．［制作］では，美術に対するコンプレックスを取り除き，技術にとらわれない様々な美術造形カリキュラムを体験する．季節感を感じさせるテーマやモチーフ，内にある感情や感覚的記憶の表出，また個々人のイメージを喚起させる様々な手法による表現活動を通して個性的な作品を制作していくことになる．［鑑賞］では，参加者同士のコミュニケーションによって，それぞれの個性を認め，褒めていくことで，作者の自己肯定感や満足感を高めていくことになり，臨床美術士の存在論的人間観に立った専門的なコミュニケーションスキルが参加者の心と心を繋げる．これは「評価」という視点ではなく，個々人の表現世界として自らが能動的に感じ表そうとした結果が醸し出す作品の個性や独創性や存在感といった価値を重要視し，皆が感じた事を自由に述べながら想像の連鎖を拡張させていく時間を共有することを認める場（ギャラリートーク，アメリア・アレナス，1998）[9]として成立することが重要である．

更には，臨床美術の描画法の特色として，感覚的な表現を主体とし，苦手意識を持たずに意欲を高め，集中して制作できる様々な工夫や配慮がなされている．造形表現活動では，具体的に様々な素材に感覚的に触れながら，様々な色彩，形態の美しさや魅力を楽しむ活動経験を通して，感動や発見をしていくことが重要であり，その過程が創造力を豊かなものにしていく．

一方，保育における造形表現活動は，そのプロセスを通して，様々な自然事象への興味や関心を持つ感性の芽生えを培い，自らの感動を伝えたり，表現するための基盤を作り，また他者の表現を認めたり協力しあう気持ちや共感する心を養うなど，多くの領域との密接な関連を持ちながら，人間形成の基盤づくりとして重要視されている．これらのことを踏まえ改めて臨床美術のプログラムが美術教育の構造化を考える上でも重要なコンテクストである事が認められるであろう．

前述のように表現教育にとって「感性」をいかに伸長するかがねらいの大きな柱となっているが，臨床美術の具象や抽象などの様々なカリキュラムが常に，「感性」を中心として「表現」と「技術」を結びつける方法論によって具体的に構成されていることに注目すべきである．臨床美術のセッションは豊かな感性を引き出すための環境構成，つまり①「外的環境」，②「表現行為」，③「他者との関係性」から成り立っており，人間形成を育成するための様々な目的や価値を示している．「外的環境」からは，主に生活を取り巻く環界の自然美や事象，文化を取り上げた様々なテーマやモチーフの美しさや魅力を感じ取れるアプローチや表現へと結びつけていくカリキュラムや導入などの喚起，援助が常にセッションの中で意識化されており，概念表出ではなく「今自分が感じていること」を表現行為に結びつけていくためのプログラムが具現化されている．「表現行為」からは，計画的作業によらない具体的な感覚的創造表現行為のプロセスの中で常に作品と対話していく姿勢を基盤にして，行為の中からの発見の蓄積によって表現が深められていくことに目的が置かれている．更に「他者との関係性」から様々なことを感じとり，自己表現世界のみに留めず他者理解や相互作用といった社会的精神活動とし

ての新たな美術の役割も示している．

子どもの美術表現の発達段階においては，概念を獲得し，それを言語との関連の中から「象徴化」した表現として表していくことはこれまで発達研究の諸説で論じられてきた．しかし，そこには常に「現実」の実体験としての内的感情や感覚を含んだ「感性」が介在し，またイメージ化していく「想像性」が育まれていくであろう．保育者には，これらの表現力の発達段階を捉えながら，子どもの発見を共有したり，気付かせる工夫や環境をつくり，創造的表現へと誘う援助が必要となる．また，造形表現を構成する方法の体験と理解，つまり，形態・色彩・量・空間等の興味関心，様々な視点やアプローチなどモノの捉え方や技術の獲得，多様な素材との接触的体験を大きなスパイラルカリキュラムの中で積み重ねることで，創造力を育成することができるのではないだろうか．ミクストメディア等の多様な表現技法が散在する昨今，絵画，立体といった区分けも見直す必要がある．乳幼児期から学校教育と続く指導環境では，その様々な選択肢を保育者が提示しながら子どもの意欲を引き出し，主体的な表現が可能となる表現力を培うことに努める必要がある．そのためにも臨床美術を含む具体的な実践知が，美術教育の再構築化の重要な骨格となるのではないかと考えられるし，低年齢児から様々な感覚的な活動に触れる経験を積み重ねていくことは，感性の伸長に影響を与えるのではないかと考える．

注）金子健二は，1976年に浦和造形研究所を設立し，共同アトリエとして芸術家たちと彫刻制作に励む傍ら，翌1977年に子ども造形教室を立ち上げている．ここで真の芸術教育を目指し，子どもたちに本物のアートに触れ，自分を解放していく表現活動を重要視した．1996年には芸術造形研究所と改組し，臨床美術の実践研究と臨床美術士の育成に力を注いだ．

Ⅳ．プログラム開発と実践研究

これまで述べてきたように，臨床美術が実践してきた方法論には，①感性を開放し，技術にとらわれず個性的な表現を可能にする造形プログラム，②感覚や感情を刺激し，能動的表現意欲を引き出す援助技術，③個々の存在を認め，他者の個性や魅力を尊ぶ存在共有の場としての機能がある．特にプログラムでは，臨床美術独自の様々な工夫がみられ，感性が解放され，感覚によって誰もが豊かな自己表現を可能にする技法や構成が組まれている．これまでの美術教育では，絵画，立体造形，工芸，デザインなど様々な分野とそれらがミクストメディアとして複合的に構成される様々なアプローチが可能となるが，それぞれの基礎技能や知識を習得するためには多くの時間と経験による修練，専門知識の獲得が必要とされてきた．しかし，臨床美術では様々な視点の提供や発想の展開を助長することにより誰もが個性豊かな表現をすることができると考え，それらを実現するための具体的な手法や素材，教材を手段として適切に整備することが重要であるとしている．美術教育において表現方法は自分で模索し，見つけ出すことが大切であるとされてきたが，多くのプロセスを飛び越え，美術表現の自己の内面世界を表現するという本質的な魅力に触れる体験が可能となるのであれば，感性の芽生えの時期である乳幼児からこのような表現活動と出会うことは豊かな表現能力の獲得に影響を齎すのではないかと考えられる．

本研究では，これまで臨床美術で実践されてきた多くのプログラムから，0～2歳児の造形活動へ応用出来るテーマや内容へと再構成し，初発的な表現活動として興味や関心を持って取り組め，表現の喜びや達成感を持つ事をできることや他領域と関連を持ちながら発達を促せることを目的としてプログラムを開発した．臨床美術の視点と日常保育からの双方の活動目的を取り入れて，0歳児クラス，1歳児クラス，2歳児クラスのそれぞれの乳幼児の発達に即したプログラムを構成した．保育で扱う表現領域では造形表現や音楽表現，身体表現が総合的に展開されることが望ましいとされており，臨床美術で行う造形制作の主旨を基本としながらも，身体活動やリズム表現と繋がるプログラムを実践した（Tab.1）．また，それらを0～2歳児の乳幼児に対して造形表現活動の芽生えを培う保育内容の具体的なモデルとして検討するため，保育実践によってその効果の検討を行った．

1．方法

宮城県仙台市内の社会福祉法人の協力を得て，これまで行ってきた3歳未満児の保育観察および臨床美術実践研究（2012，保坂ら，日本保育学会）の結果より，本実践では更に同法人内の保育園2カ所（A保育園，B保育園と称する）での同一プログラムの実施を行い，その効果を検証することとした．2012年10月～2013年2月にかけて，0歳児，1歳児，2歳児の各クラスでそれぞれ1回の保育観察と3回の造形活動のプログラムの実践を2施設において計18回実施した．尚，研究実施にあたり，各保育園園長より研究協力への依頼を口頭及び文章にて十分な説明を行い，同意を得た．また参加乳幼児の保護者に対して園長より主旨説明をし，協力への意志を口頭により確認することができた．実施には，報告者でもある臨床美術士がプログラムの作成から実施までを担当し，現場保育士は，事前に指導案を理解した上で乳幼児の援助にあたった．A保育園で実施した事後には，各プロセスでの反省や気づきや課題など各保育士が実践記録をまとめ，抽出された課題と観察ビデオをもとに改善したプログラムをB保育園で実践した．このことにより，プログラムの精度や効果の向上が

Tab. 1　臨床美術実践プログラム

クラス	テーマ	内容	ねらい
0歳児	くっつきのき	Pペーパーにスクリブルし，ボードへ貼って楽しむ.	0歳児の発達過程に見られる，自発的な環界への働きかけや運動機能の発達，新しい体験の獲得の助長を目的とし，スクリブルや，貼るなどの造形行為を通して，色彩や形態，素材などへの興味を持たせながら活動を積み重ね，表現の楽しさの芽生えを培う. 作品を制作しながら，遊びを通して変化させていく楽しみの中で，感覚的な発想やイメージを豊かにしていくことの喜びを知る.
	ちぎり和紙のもしゃもしゃトンネル	色和紙や花紙をちぎり，ボードへ貼付け，トンネルや壁面にし，空間的遊びへ展開する.	0歳児の発達過程に見られる，周囲環境への興味関心や好奇心の芽生えを助長し，あそびを通して造形の魅力を感じていくことで豊かな感性を育む基盤をつくる. 色和紙の色彩と素材感の魅力に触れながら，「ちぎる」という体幹運動と微細運度の身体機能統合の発達を促し，それらを貼る，また立体物に変化させていく事で，実感を通した，空間造形感覚の芽生えさせていく.
	春のいぶきぷよぷよびにょーん	紙粘土を入れたカラータイツの感触や形の変化を楽しむ.	指先手先の発達を促しながら，ストッキングに入った紙粘土の可塑性や感触を楽しみ，立体造形の魅力を知る. 春の生命の息吹を感じながら，様々な形の変化を表現に結びつけていく想像性の芽生えを培う.
1歳児	点と線のランチョンマット	ランチョンマットにシールを貼り，ローラーで絵の具を着彩し，ステンシル作品にする.	1歳児の発達過程に見られる，周囲への積極的な興味関心や運動機能の発達を助長し，シールの貼り剥がしやローラー等の道具の使用などを通して目と手の協応反応などを促す. 絵の具を混色させる表現を経験することで，色彩の美しさへの興味関心や色が変化していくことを発見する喜びを知り，豊かな感性の芽生えを養う. 自分の表現によって完成したマットを日常や生活の中で使う喜びを知り，造形表現が生活に創造的視点を齎す意義理解への土壌を育む.
	おどろき！もみのき！クリスマス!!	画用紙にシール貼りとスクリブルを楽しみ，毛糸を通した立体ツリーに仕立てる.	クリスマスの季節感を成長の中で感じ取り，楽しい雰囲気を創造的な表現へ結びつけていく素地を養う. シール貼りによる構成感覚とスクリブルによっての色彩表現を楽しみ，モールを付けることで微細運動機能の発達も促す. 自分の作成した画面が，立体に変化することによってできる偶然性から新たな発見を得る喜びを知る.
	干支のへびをつくる	線と色彩によってへびのイメージを表現し，身体遊びに展開することによって総合的表現とする.	新年への喜びの気持ちと干支の文化に触れる機会とする. へびのイメージをアナログ的に表現することで，線と色彩の構成の面白さを体感する. 完成した自分の作品を皆で共に遊びにつなげていく喜びを感じ，造形表現から身体表現へのイメージの展開を楽しむ.
2歳児	紅葉屏風	紅葉のイメージをスクリブルやバチック，ラギングにより表現し，技法の積み重ねによりできる作品の豊かさを感じる.	まわりのものへの興味関心が強まる2歳児に対して，様々な表現技法を体験し，自己を表現していくことの意識化を促し，豊かな造形表現の芽生えを培う. 自然の美しさに気づく視点を提示し，色彩表現の魅力を身体感覚で体験することで，環境からの刺激を表現に結びつけていく感性を育てる. スクリブル，ローラーによる着彩，ラギングといった様々な表現技法の違いや積み重ねによる表現の深まりを感じ，各工程を楽しみながら集中力を高める．また微細運動機能の発達も促す.
	風の子マント	大判の障子紙に風のイメージでスクリブルと刷毛による色彩表現をし，マントとして身につけ，身体表現へ展開する.	身体による表現活動がより活発になる2歳児に対して，ダイナミックな造形表現活動と，身体表現に展開していくことで，遊びを通した表現の喜びを共感していく. 「風」という身体感覚で捉えている自然現象を意識化し，表現に結びつけていくことで，感性によってイメージしていく力や発想力の芽生えを培う. 自分で制作した作品を身につけて，身体で表現しながら，なりきることや見立てるイメージ遊び，発展性を持った遊びに展開していく主体的な表現活動となるよう援助する.
	雪景色のオブジェ	紙粘土を雪山に見立て，叩いたり伸ばしたりし，小枝や木の実の自然素材，原毛やモールなどで彩る.	様々な素材へ興味関心を持つ2歳児に対して，紙粘土などの触覚的な素材と関わる立体造形活動を体験することで，創造力の芽生えを培う. 雪景色を想像しながら自分の世界観の中で，紙粘土の感触や小枝，木の実などの素材を扱うことを楽しむ. 自然物の美しさや魅力に触れ，感性の芽生えや豊かな情操を育む.

みられ，より的確に介入の妥当性について検証することができた.

2．結果

各年齢の乳幼児の姿より，発達過程や発達課題を抽出し，季節に沿って様々な体験ができるようプログラムを構成した．0歳児では，色彩やものなどに対する興味関心を引き出し，初発的な表現活動の芽生えを培うことを目的に，触れる，遊ぶ，試すなどの行為を重要視したプログラムを組んだ．1歳児では，様々な技法や素材に体験的に触れられるよう環境を作りながら，スクリブル，シール貼りなどの基本的な造形活動を作品として完成させていく喜び

Fig. 1　「光の三原色による影絵」（1歳児）

Fig. 2　「果物や野菜の等身大写真パネルによる導入」（0歳児）

Fig. 3　「Pペーパーとパネル布を活用した貼り剥がし遊び」（0歳児）

Fig. 4　「大判障子紙に大胆にバチック表現をしたマントを羽織って風の子になる」（2歳児）

を味わえるよう展開し，季節感を考慮したテーマでの造形表現活動として構成した．2歳児は，周囲への興味関心がより強まり，身体活動も活発になり知的好奇心も深まる．この時期の幼児に対して，より豊かで，ダイナミックな表現活動が行えるよう，作業のスケール感を大切にしながら，多くの技法や道具使用を取り入れたプログラムを提供した．また，本研究ではこれまでの臨床美術プログラムや理念を大切にしながらも，低年齢児の発達に沿った内容へと工夫し展開した．

(1) 導入の工夫

本研究では，各年齢の発達段階に合わせながらも，表現の芽生えを培うための様々なイメージ喚起法を活動導入として用いた．ペープサートや影絵などの劇による導入の他，写真集の提示や本物の素材，自然物の提示などによって，低年齢児への理解を求めるのではなく，豊かな感受性の素地を養うことや活動へつながる感覚的刺激を目的とした．（Fig.1，2）

(2) 多彩なテーマ

3歳未満児は，活動テーマを理解させことよりも，感覚的な興味関心を促していくことが適していると考えられるが，表現の素地の育成を考慮し，季節感や環界の事象について五感を通して触れることで，生活の中で表現していくことの魅力を伝えることとした．（Fig.3，4）

(3) 多様な表現方法や教材道具

本実践では，各年齢の発達を踏まえて，可能な限り様々な表現活動を体験できるよう，スクリブル，バチック，シール貼り等の基本的な作業を軸としながらも，臨床美術ならではの価値観を大切にした表現活動として発展できるようプログラムを構成した．また，一般的に道具の使用が難しいと考えられている低年齢児に対して，タンポ，ローラー，刷毛，扇筆，肉たたき棒などを取り入れ，上手く扱えなくても触れる体験が後の表現活動へつながることを期待して導入した．安全性を配慮しながらも美術の専門的画材や材料等の本格的な教材を各発達段階で使用しやすいよう工夫を施し，自らの作業的な力以上の表現や特殊な表現技法に興味関心を示させ，意欲を引き出すことができた．（Fig.5，6）

(4) 鑑賞会

臨床美術は，制作後に互いの作品を鑑賞しながら，自他の長所を確認できる場を重要視しており，達成感や自己効力感の向上を図っている．低年齢児の発達段階では，自分が受容される存在であることを実感することが重要であるが，また同時に他者（友達）からの影響や良い点を評価する心の芽生えを伸長するためにも可能な限りにおいて，鑑賞会を実施した．（Fig.7，8）

3．活動中における子どもの姿

表現活動中の子どもの姿について，保育活動を共に援助した保育者らが［導入］，［制作］，［鑑賞会］の場面ごとに観察記録を行ったデータから，子どもの活動に対する姿を分類し（総出現数 n=233），分析を行った（Fig.9）．特に多く挙げられたのは［意欲や積極性］（44），［興味や関心の表れ］（40），［教材や技法の魅力を感じる］（25）姿であり，臨床美術プログラムの様々な感覚刺激（視覚刺激，音

Fig. 5　「和紙に墨と食紅絵の具で表現する」（1 歳児）

Fig. 6　「紙粘土の塊を道具で叩いたり，木の実や枝で飾る」（2歳児）

Fig. 7　「紅葉屏風を皆で鑑賞する」（2 歳児）

Fig. 8　「自作の風の子マントを着てファッションショー」（2歳児）

楽表現，身体表現等）による導入法が子どもの興味を引きつけ，美術の専門的な教材や技法が表現への意欲を高めたことがわかった．また，［多様性や個性，個人差］（21），［保育者の働きかけによる意欲的な姿］（17）も挙げられ，発達や月齢による個人差に対する保育者の適切な援助を必要とする活動中の人的環境の重要性についても示唆された．［イメージの広がり］（13）や［自発性］（13）といったと創造的活動へつながる子どもの発話（特に２歳児）や行為も認められ，主体的な表現活動への芽生えを培う意義を確認できた．さらに臨床美術で行う鑑賞会によって自分の表現が［認められる喜び］を実感している姿が挙げられると共に，他児の作品の魅力にも目を向けられる子どももおり，自他の表現を認め合う共存の心がこうした取り組みによって育成されることを期待するものである．

多くの体験が初体験となる子どもにとっては，様々な教材に触れること，道具の使用など戸惑いも見られた．これらは，活動の過程で徐々に慣れてきたり，２度３度と繰り返し行う，使用するなど経験を重ねることで，自分の表現方法へと身につけることができ，自由な表現力の獲得のために多くの手法や技法に触れることが選択肢を広げる要素となると考えられる．

子どもの集中力の問題について，活動によって高まったという姿と，長引くことによって集中力が途切れる姿と，双方の観察があった．このことは低年齢の発達過程や個人差，また活動に対する子どもの姿に対して保育者間の相互理解を得ながら，子どもにとって無理のない設定や内容の配慮が必要であることを示している．

４．保育士の観点から得られる課題

保育士から活動ごとに感想を提出してもらい，自由記述の内容ごとにカテゴリー分けを行った結果，特に挙った観点は順に，［教材］（31），［内容］（19），［導入］（10），［興味関心］（9），［環境］（8），［鑑賞］（8），［個人差］（5）他であった（Fig.10）．

特に，日常の保育と比較し，様々な教材，表現方法，技法に触れることで，子どもたちの表現の可能性を引き出せることを実感し，自分が認識していた子どもの姿以上に，様々な面があることを発見した等の気づきが意見として挙がった．具体的に臨床美術で使用されているオイルパステルやローラー，刷毛などの画材，また色和紙，布，粘土，自然素材等を使用することで，３歳未満児の表現への意欲や表現の幅の広がりを感じることができた．また，導入では，視覚的刺激によるイメージ喚起を多く導入したが，写真集の活用や具体的モチーフの提示などの効果が新鮮であったとの意見が挙った．一方で子どもが内容を理解するには難しいのではないか等の意見も挙ったが，「感性の刺激」と「子どもの理解度」についての認識をより深く検討していく必要がある．環境については各発達段階に応じ，ねらいを定めた設定が必要となり，特に月齢差の大きい低年齢児ほど子どもの姿に対応しながらどのような活動へ展開していくか臨機応変な対応が必要であることが挙げられ

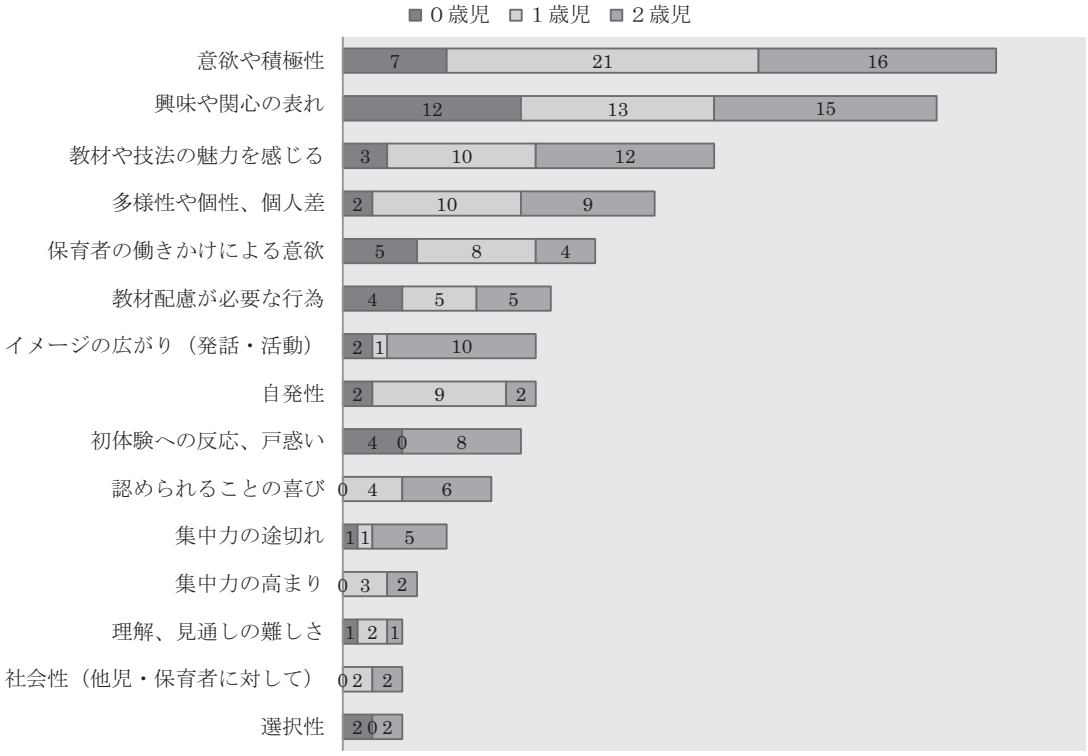

Fig. 9　観察記録からの子どもの姿の分類　n＝233

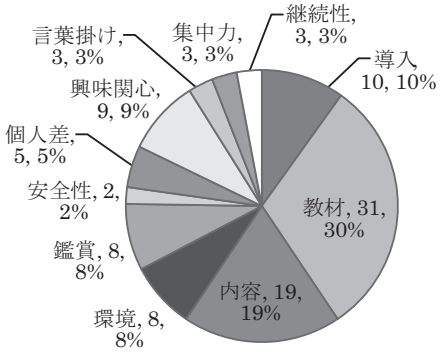

Fig.10　臨床美術実践に対する保育士の観点

た．鑑賞については，臨床美術の特性でもある個々の作品を肯定的に評価することで，子どもたちが自分の表現を受け入れられ，認められることを実感できる場として大切であることを実感できた．

保育活動を共に援助した保育士とは全活動終了後のディスカッションより意見を得る事ができた．日常の保育と比較し，様々な表現方法や教材，技法に触れ，自分が捉えていた子どもの姿以上に，様々な表現の可能性があることを発見した等の気づきが意見として挙がった．3歳未満児の発達段階での活動に対しての固定概念を払拭し，子どもの長期的な成長の可能性を見据えながら保育を計画，展開していくことの重要性を再確認した場ともなった．様々な教材を積極的に取り入れたことは，子どもの興味関心を引き出し，様々な表現方法を生み出す結果とつながったと思われる．道具等を上手く使いこなせない，使用目的を理解し難いなどの点は勿論あるが，触れてみる，体験してみるなどものと関わる段階的な経験が，表現意欲の芽生えとして染み込んでいくと良い．また，時間配分と集中力の問題や，テーマを子どもが理解できるか，教材を扱えるか等の点に置いて意見が挙がったが，きっかけとしての体験という認識と，「準備期のための導入」とした3歳以上児へ継続していく保育内容として構成していくことを考える事が，0～2歳児での造形表現活動の意義となるであろう．またこの発達段階においては十分な感覚的表現活動が重要視されるべきであり，感性を伸長することを目的とした臨床美術の方法論を保育に適した形で応用していくために，今後更なる実践の蓄積が重要となると考える．

Ⅴ．3歳未満児に対する造形表現活動の主要素の抽出

これまで，3歳未満児を対象として保育現場における課題をもとに，臨床美術メソッドに基づいたプログラムの実践研究を進めてきた．乳幼児は身体の発達とともに外界への好奇心が旺盛になり，様々な物への関心や触れる，試すなどの行為を通して，物事の成り立ちや自分との関係性について遊びを通して学んでいく．保育者はこれらの自発的行為を見守りながら個々の育ちをより豊かなものにするため，世界の広がりを垣間見せたり，様々な方法論やヒントを与えながら，その成長を支えていく必要がある．多くの保育所では造形表現活動に結びつく様々な手法による活動を展開しているものの，子どもが満足感や達成感を持てる内容であるか，また活動自体が子どもの成長と直接的にど

う関連しているかについて悩みや問題意識を持っている．

臨床美術実践からは低年齢児での造形表現活動の難しさとして，理解力，作業性，集中力についての問題意識が強く，保育活動に対する発展性について保育者自らが制限してしまうことで，子どもの成長の可能性を十分引き出すことができていないのではないかという課題も認められた．造形表現活動は楽しく魅力的であるが，同時にその自由度の広さや評価の多様性ゆえ，保育指針が示すねらいだけでは，日々の具体的活動へどう落とし込んでよいかが課題であり，保育者の負担が大きい現状といえる．様々な保育カリキュラム雑誌や教材本が後押しするものの，これだけでは即時的ないわゆるネタ探しだけ（藤原，2008）になってしまい，人間形成の基盤づくりとして発達に伴った連続的保育援助としてのマクロ的視野に立った見通しも立たなくなる危険性がある[10]．造形表現活動は多種多様であり，分野，素材，教材，技法の組み合わせなどを考えれば，アイデアと研究次第で限りなくプログラムは生み出せるといってもよい．だからこそ人間形成という俯瞰的視野と各発達段階という「子どものいま」の双方を鑑みながら，理解度，作業可能性という目的達成的な意図だけでなく，体験の積み重ねとして様々なモノやコトに触れる環境を設定していくことが必要である．

臨床美術では芸術家の経験値から，これまで段階的に考えられていた美術教育の順序を超えて，内面から滲み出る本質的な表現行為を可能にする技法や教材など，直接的に感性に訴えかける表現方法を提示し実践してきた．また，これらのアプローチを０～２歳児への保育活動に応用してきた試行よりいくつかの示唆も得られた．例えば，乳幼児においても，美しい風景の写真集へ興味関心を抱く事や，スモールステップを積み重ねていく事で，活動への集中を持続し，作品を完成させることに達成感を持つこと．それぞれの作品を皆の前で褒める鑑賞会を行うことで，自己の作品が褒められる事の肯定感や他者の表現の魅力を感じとろうとする開かれた心の基盤づくりに繋がるのではないかという点などである．このようにこれまで得た知見をもとに０～２歳児の各発達段階で重要と思われる造形表現活動の要素を抽出したい．低年齢児はその発達過程の中で，実際に行える造形的作業が限られてくる．しかし，ひとつひとつがシンプルな活動であっても，その成長過程に与える影響を考えると重要な意義を持っている．このことを十分に考慮しながら造形表現活動を考える上での根幹となるべく活動や要素を挙げていく．

乳幼児（０～２歳児）の造形活動

①色彩遊び

a．スクリブル

乳児も腰が据わり，ものを握れるようになると，興味関心からパステルなどを持ち，画用紙などの支持体へ自発的に描き始める．低月齢児では握る力はまだ弱く，筆圧が弱いため，描いた線が認識できるような柔らかいオイルパステルなどが適している．舐めるなどの行為もみられることから画材の安全性への配慮が必要である．支持体は，紙を手で押さえることができないため作業中に動きにくい厚手の画用紙等か，テーブルへ貼るなどの工夫も必要である．色画用紙や様々なテクスチャの紙などいろいろ素材へ描いてみることで興味や意欲を引き出せる．この時期のスクリブルでは点や線から円運動へと手先，腕の発達に伴って，徐々に力強く，なめらかに，大きなストロークで描けるようになっていく．様々な色を使用し，混色の変化などを楽しみながら，活動プロセスを何度も繰りかえす行為の体験を重ねることが重要である．スクリブルは発達過程における基本的な描画活動であり，子どもの発達の初期段階において最も重要な行為のひとつである．工夫しだいで様々な形に発展させ豊かな活動にも展開できる．注意点として，作品を大人が過度に仕立てる必要はなく，子どもの素朴で純粋な表現（表出）の痕跡を最大限に尊重した装丁などを心掛けたい．

b．絵の具遊び

保育において初発的な絵の具との関わりでは，十分な環境さえ用意できれば，直接的なフィンガーペインティングなども大きな刺激となるが，低年齢児ではアレルギーの不安や安全性などの問題，生活空間の中での活動の場として制約がある現場も多い．水彩絵の具のにじみ絵や本研究での食紅絵の具などは，色彩の心地よい広がりや変化の美しさを感じることができる点など豊かな感性の土壌作りとして多いに経験させたい技法である．オイルパステルとの併用でバチック効果を楽しんだり，刷毛，ローラー，スポンジ，タンポなどの道具を使用することで，自らの作業範囲を越える表現が可能になったり，コントロールを越えた表現を発見したり，創造的な表現を楽しむ素養を培うことができる．この時期は，こうした制作過程をいかに感覚的に楽しめるかという点を最も重要視すべきである．絵の具での制作では様々な色が混ざり合った結果，濁ってしまうことも多々あるが，失敗のないような結果ありきの活動が目的とならぬよう保育者の理解が必要となる．

②立体造形遊び

a．粘土遊び

子どもは砂遊びやどろんこ遊びと同じように，粘土の感触を楽しみながらその可塑性から変容する不思議な形態に想像力を働かせる．３歳頃になると油土などが個人に与えられる保育現場が多いようであるが，未満児に対してはどのような段階を経て導入すればよいか．小麦粉粘土での代用は一般的であるが，アレルギーの有無の確認など乳児ではリスクもある．例えば，本研究では０歳児に対して，直接粘土を触るのではなく，カラータイツの中に紙粘土を入

れる事で，その感触を楽しみながら形の変化を楽しめる工夫を行った．微細運動の発達とともに様々なものに触れ，いじる，つまむ，押す，たたく，伸ばすなど粘土に触れるとき手先で行う運動は数知れない．また，1，2歳児では大きな塊としての粘土に触れ，身体全体で粘土の存在と向き合う体験や道具を使う事で形を変容させることができること，多様な素材と混合して使用することで表現の広がりを感じることが出来る．低年齢での粘土活動では，なにかを作るという意識よりも，実際の物質存在に直接触れていく体験や行為に意義がある点を重要視すべきである．

b. 紙工作

立体的な制作を扱う場合，形を形成する過程で切る，貼るなどの作業が必要となる場合が多く，低年齢児の活動では制限される事が多い．しかし，ある程度の準備や保育者の援助により，共に作っていく活動を通して，立体造形の魅力を伝えていく事は重要と考える．例えば平面的な紙を折る，くっつけることで立体的なものに変化していくというおもしろさに気づく，また紐通しなどは早い段階からも可能であり，本研究ではツリーの装飾に毛糸を通す作業を保育者の多少の援助によって1歳児が挑戦し集中して楽しむ過程が見られた．また制作した造形物を遊びとして活動を展開していくことも保育の魅力であるといえよう．身体的な遊びやコミュニケーション遊びへと発展させることのできる立体制作を考えることも可能である．しかし，立体制作としての目的には，空間構成感覚や形態のおもしろさを楽しむ感覚を培うねらいもあり，創造的活動と使用用途が明確な作業とは考え方を区別すべきであろう．また既存の形（紙コップや牛乳パック等）を利用することも安易でよいが，皆が同じ形になってしまいがちである点と自由度が利かなくなる点などは教材研究が必要となる．

③ものとの関わり遊び（行為）

敢えてこの分類を設けた理由は，乳幼児の造形表現活動につながる遊びの中で子どもが自ら自発的に行う独特な活動であることにある．子どもは紙（例えば新聞紙）を丸めたり破ったりすることや，粘着性のあるもの（シール）を貼ったり剥がしたり，箱やビニール袋などにものを詰め込んだり出したりという行為を楽しむ．こうした活動を促進するための環境整備はどの保育所でも行われており，身近なパックや布地等で保育者が手作りで作成した遊び道具などの工夫には感心させられる．こうした大人の日常生活での行動の縮図的な作業のひとつひとつを遊びとして楽しむ子どもの姿には，そうした遊びが後の基本的生活力の基盤になるであろうという視点と，行為が表現活動へ結びつく想像的・創造的作業としての可能性を感じさせる視点を持つこつができる．身体感覚を伴いながら破る，切る，丸める，くっつける，貼るなど，様々なもの自体との関わりの中で足したり，引いたり（加減）する行為の繰り返しの中で，もの

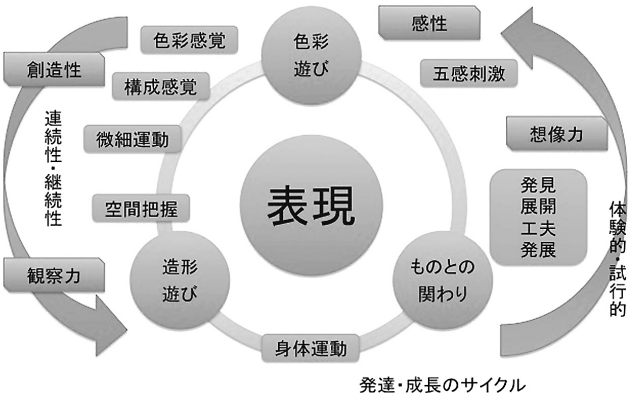

Fig.11　乳幼児の造型表現活動の主要素

の存在（あるいは消失）を実感しているのではないかとも捉えられる．こうした活動は日常のなかで，それぞれが部分的に，断続的に，あるいは突発的に繰り返されながら，ときにはひとつの活動としてまとめあげ作品化していくことも，自分がしている行為を確認し，達成感や充実感を得て，次の意欲へつなげていく事にもなる．本研究では紙遊びに色和紙やおはながみなど乳児の手先の力に合わせ柔らかい紙を使用したと同時に，色彩感覚の刺激もねらいとして様々な色合いの紙を用意し，興味関心を高めることができた．また破った紙をダンボール板に貼ることで，壊れてしまった形を再生していく感覚の体験もねらいとした．

④統合的活動（全てを関連づけ，発展させる）

以上のように3歳未満児の造形表現活動では，色彩遊び，立体造形遊び，ものとの関わり遊びの主な三つの活動を挙げた．これらひとつひとつの活動は保育の中で自由遊び時や短時間活動として，無理のない範囲で日常的に行われているであろうし，継続的に積み重ねられてくことが望ましい．しかし，それらの活動は表現活動の中で相互に関連づき，発展させることもできる．家庭的な環境構成を望む保育において特に未満児への設定活動への是非の議論があるかも知れないが，日常の断片的遊びや活動を意味付ける作業として，統合的なプログラムの実施は重要であると考える．これまで挙げてきた全ての活動や遊びが表現へと結びつく．複合的な活動としてまとめていくことで子どもも保育者もこのことを意識化することができる．更には，五領域とも関連していくことは言うまでもない．まさに感性の芽生えの時期である0～2歳児への造形表現活動のアプローチは，その後の発達や人間形成とも大きく関わることであるという再認識を持って様々な活動を体験的試行的に，継続的に，発展的に，立体的に構成していくことが重要であると考える（Fig.11）．

Ⅵ. おわりに

現在，保育の動向は子ども・子育て支援新制度の検討に見られるように幼保連携，一体化の方向へと向かってい

る．これまで長らく幼児教育と保育を分け隔てていた制度が次の時代へと移行しようとする中で，3歳未満児の保育と3歳以上児の教育とを連続的な保育（援助）の営みとして接合するために，今一度縒り直す作業が必須であるであろう．幼児教育か保育所保育かという議論は，子どもの発達にその明確な区切りがあるはずもなく，連続的な成長の日々の中での保育活動や表現活動の援助を人間形成という大きな視野の中で捉えていかなければならない．

本研究では，3歳未満児に臨床美術の方法論を導入した実践研究によって，乳幼児にあっても早期からの能動的な表現欲求や好奇心が芽生えていることを確認することができ，様々なものに出会い，触れる体験の積み重ねを経験として行く中で，表現のための準備期（レディネス）の基盤づくりとして感覚刺激による感性の芽生えを目的とした実践を行ってきた．そこでは，様々なテーマやモチーフ，教材への興味関心と表現への強い意欲の関係性が見られ，年齢を考慮した安全性への配慮をしながらも，いわゆる本物のモチーフやテーマ，画材等を示すことで表現への意欲を高めることができた．また低年齢児にできるシンプルな作業内容の中でも，様々な感覚を刺激する教材や，画材等の工夫により，より達成感を持たせることも能動的な表現活動へと展開する一要素であると確認できた．この時期から感覚的に造形表現活動に十分に触れていくことが，その後の主体的な表現活動へと結びつく礎となるのではないかと考えている．

また，これらの実践知より，初発的な造形表現活動として重要とすべき主要素の抽出を行った．様々な素材や技法と出会いをひとつひとつ積み重ねながら，色や形の豊かさやおもしろさを発見し，感覚的刺激を受け，創造的表現行為の芽生えを大切に育むことで感性基盤の育成ができると考える．造形表現活動を通じて，世界との関わりを実感できる豊かな感性を伸長し，様々なモノの捉え方やアプローチ，体験を発達過程の大きなスパイラルカリキュラムの中で積み重ねることが創造力を育成すると考えられ，その多様な選択肢を提示しながら子どもの無限の可能性を引き出すための努力が私たちには不可欠である．

引用文献

1）保坂遊，青木一則，上村裕樹「保育現場における造形表現活動の実態調査―宮城県現任保育士アンケート調査より―」『臨床美術ジャーナル』，第2巻第1号，83-90，2013

2）遠藤利彦ら『乳幼児のこころ　子育ち・子育ての発達心理学』有斐閣アルマ，2011，41-46

3）小泉英明編著『乳幼児のための脳科学』フリーダム，2010

4）佐々木正人著『アフォーダンス―新しい認知の理論』岩波書店，1994

5）三浦佳世『現代の認知心理学Ⅰ知覚と感性』北大路書房，2012，2-27

6）無藤隆『幼児教育のデザイン　保育の生態学』東京大学出版会，2012

7）金子健二「痴呆患者に及ぼす芸術の影響について―アートセラピーの実践―」，『感性福祉研究所年報』，東北福祉大学感性福祉研究所，Vol.1，2000，197-204

8）保坂遊，青木一則，金子健二「子どもと痴ほう性高齢者を対象とした臨床美術にみる感性と表現についての一考察～アナログ画法を中心に～」『日本感性福祉学会第4回大会抄録集』，2004

9）アメリア・アレナス「なぜこれがアートなの？」淡交社，1998

10）藤原逸樹「幼児美術教育のかかわりに関する研究」『美術教育学：美術科教育学会誌（29）』，501-512，2008

（本研究はH23～25年度科学研究費助成事業の補助を受けて実施した．）

Abstract

This study look at a program developed to achieve the enhancement of the creative expression activities used in childcare for children under 3 years old. In practice, we developed a program that introduced the technique of Clinical Art. At nurseries in two places, it was carried out a total of 18 times in each class of 0-2 year olds. As result, which can increase the expression motivation by giving the interests of the motifs and different themes, to devise the art materials, it could be deployed to the active activity.

From the participating nursery teachers, we were able to get opinions about such as the course materials, contents, interest, environment and appreciation. Also they were able to discover aspects of the children's personalities, and were able to obtain new viewpoints for the children's expressive activities. Furthermore, key elements in the children's model expressive activities such as "playing with color", "playing with formative", "playing with object" and "synthetic activities" ,were able to be drawn out. And even though they are simple activities, they were able to understand the important significance that expressive models activities have in the growth of a child's mind and body.